

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Whale Hunting and Indigenous Rights of a Northwest Coast People, Nuuchah Nulth in Canada

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005856

<研究ノート>

カナダにおける北西海岸先住民ヌーチャヌルスヌーチャヌルスの捕鯨と先住権

岸 上 伸 啓*

<Notes on Research>

Whale Hunting and Indigenous Rights of a Northwest Coast People, Nuu-Chah-Nulth in Canada

Nobuhiro Kishigami*

Northwest Coast peoples such as the Nuu-Chah-Nulth and Makah are known to have been whaling peoples historically, hunting gray and humpback whales well before contact with Europeans. While the Nuu-Chah-Nulth have not practiced whaling for over a century, the Makah resumed whaling in 1999 after a 70 year hiatus. This short paper considers the possibility of Nuu-Chah-Nulth's resumption of whaling in terms of indigenous rights and current social situations of aboriginal nations. The Maa-Nulth groups of the Nuu-Chah-Nulth concluded The Maa-Nulth Treaty with Governments of Canada and British Columbia, which was effective as of April, 2011. Nowhere in the treaty is there a mention of whaling rights. They decided not to include whaling in the treaty in order to conclude negotiations as quickly as possible. Although it does not deny possibility of the revival of whaling, the Maa-Nulth people appear to have instead focused their priorities on economic aspects such as commercial fishing, logging, mining rights which will improve their life and economic conditions. Also, the tourism industry including whale watching and canoeing has been successful along the west coast of Vancouver Island for the past few decades. Considering the current situation, this author finds that Nuu-Chah-Nulth's resumption of the whale hunt will be very difficult for at least the next few decades.

はじめに

北アメリカ大陸北西海岸に居住する先住民の中でヌーチャヌルス (Nuu-Chah-Nulth) やマカー (Makah) の人びとは、捕鯨民として知られている (Arima and Hoover 2011; Cote 2010)¹⁾。彼らは欧米人と接触を開始するはるか以前からコクヅラやザトウクジラの捕獲に従事していたが、1990年代になるまで半世紀以上にわたり捕鯨を中断していた。

* 国立民族学博物館 教授 (National Museum of Ethnology)

キーワード ヌーチャヌルス、クジラ猟、復活、先住 (民) 権、カナダ

Key Words Nuu-Chah-Nulth, Whale Hunt, Revival, Indigenous Right, Canada

マカーは1999年に約70年ぶりに捕鯨を再開したが、ヌーチャヌルスは現在に至るまで1世紀以上も捕鯨を行っていない。

ヌーチャヌルスはかつてヌートカ (Nootka) と呼ばれていた民族であり、マカーはそのグループのひとつと見ることができる。現在では、米国とカナダの間にある国境によって分断されているが、ワカシャン語族 (Wakashan language family) に属し言語や文化の点では同系である (Arima and Dewhirst 1990; Renker and Gunther 1990)。なお、ヌーチャヌルスはカナダに属し、マカーは米国に属している。

米国ワシントン州オリンピック半島に居住するマカーは、この地域ではもっとも活発に捕鯨を行い、クジラを重要な食料資源としてきた人びとである (秋道 1994: 162-168; Renker 1996; Singh 1956, 1966; Swan 1870)。米国政府がかつてマカーの人たちと締結したニアベイ条約(1885年)の中に、捕鯨の実施は彼らの権利の一つとして明記されていた。このため、1970年代以降の米国政府は基本的に反捕鯨の立場を取っているが、マカーの人びとによる捕鯨復活の主張を認めざるを得なかった。米国政府とマカーは国際捕鯨委員会 (International Whaling Commission) においてマカー社会における捕鯨復活の正当性を主張し、マカーの捕鯨を「先住民生存捕鯨」(aboriginal subsistence whaling)として認めさせた

(岩崎 2011; 浜口 2012; Renker 1996)。そしてマカーの人びとは、1999年に約70年ぶりにコククジラを捕獲したが (Cote 2010)、捕鯨再開の前提となる環境影響評価が十分にないという理由から環境保護団体が告訴を繰り返し行なっている。このため、マカーの人びとは、捕鯨を再び中断し、現在、環境影響評価の結果が出るのを待っているところである (浜口 2013)。

マカーの居住するオリンピック半島の北方にファンデフカ海峡 (Strait of Juan de Fuca) を隔ててバンクーバー島が存在している。その西海岸に沿って分布するヌーチャヌルスの人びともまた昔からザトウクジラやコククジラを捕獲してきた。マカーによる捕鯨の再開はカナダのヌーチャヌルスの人びとに捕鯨再開への希望を与えた。彼らも民族誌的には捕鯨民として知られてきたが (Drucker 1951)、これまでカナダ政府らと条約を一切締結してこなかったため、捕鯨の実施に関する法的な根拠が米国のマカーほど明確ではなかった。

本稿の目的は、カナダ・バンクーバー島西海岸に居住するヌーチャヌルスの捕鯨の歴史を簡単に紹介すること、そして先住民の権利と社会情勢の視点から彼らの捕鯨の再開の動きと可能性について検討を加えることである。なお、本研究は、文献調査とバンクーバー市およびバンクーバー島のトフィノ、ユクルーレット、ビクトリア市におけるインタビュー調査 (2013.8.9~8.22) に基づいている。

カナダ・バンクーバー島西岸における捕鯨の歴史とヌーチャヌルス

カナダ・バンクーバー島西海岸沿岸における鯨資源の利用は2000年以上前から認められ

るが、積極的に捕獲を始めたのは今から1000年ほど前と考えられている。バンクーバー島西海岸沿岸やオリンピック半島ニアベイの近海では、春になるとメキシコ沖からコククジラが回遊してくる。また、バンクーバー島のバークレー湾にはザトウクジラが一年中、住みついている。このような生態学的条件のために、オリンピック半島のマカーはおもにコククジラを、バンクーバー島西部ではザトウクジラやコククジラを捕獲した(図1)。北西海岸地域では、バンクーバー島西岸とオリンピック半島周辺部のみが上記のクジラの回遊経路であり、捕鯨を実施することができる生態学的条件を満たす数少ない場所であった²⁾。

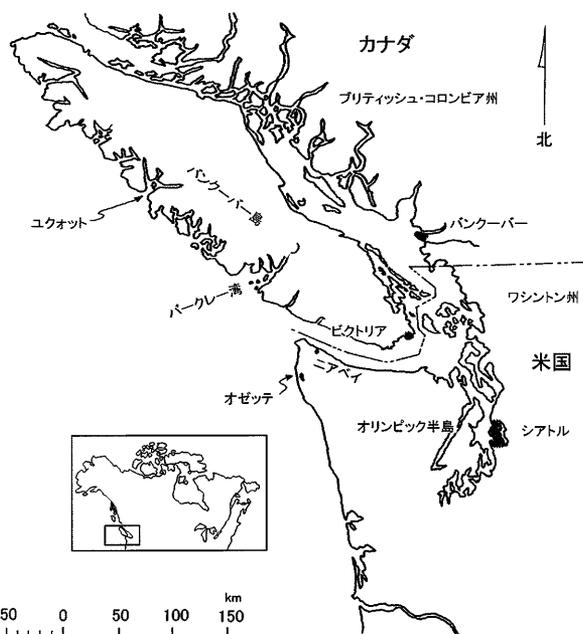


図1. バンクーバー島周辺の地図 (Huelsenbeck (1988 : 2) を基に作成)

考古学調査によれば、米国ワシントン州オリンピック半島やバンクーバー島西岸では1000年以上の長きにわたって捕鯨が行われてきたことが知られている。ワシントン州オリンピック半島ニアベイの近くで発見されたオゼツテ (Ozette) 村遺跡は、西暦1750年ごろに泥流が同村の一部に流れ込み、廃村になるまで少なくとも1500年以上にわたってマカーが住んでいたと考えられている。この遺跡からは多数のコククジラとザトウクジラの鯨骨が出土している。遺跡内の動物遺存体の分析によると、クジラの肉や脂肪が全体の中で占める割合は75%以上であり、それらは同村内で消費されるとともに、他村や他地域に交易されたであろうと推定されている。オゼツテ村の経済 (食料獲得) においては、捕鯨はきわめて重要な位置を占めていたと考えられている (Huelsenbeck 1988)。

バンクーバー島西部のバークレー湾周辺で考古学調査を実施したマクミランらによると、この地域で捕鯨が活発になるのは1000年ほど前からであるという。しかし、4000～

5000年前の遺跡からも鯨骨が出土しており、その開始時期はさらに遡る可能性があるという(Arndt 2011; McMillan, McKechnie, St. Claire and Frederick 2008; McMillan and St. Claire 2005, 2012)。モンクス (Monks) らは、バークレー湾周辺では少なくとも4000年前からクジラを利用していたこと、少なくとも2500年前には捕鯨が活発に行われていたこと、そして主要な捕獲対象種はザトウクジラであったこと、捕鯨がヌーチャナルス文化の形成過程で重要な役割を果たしたことなどを指摘した (Monks, McMillan and St. Claire 2001)。近年、アーンド (Arndt) はバークレー湾地域にあるティシャー (Ts' ishaa) 遺跡とフイー (Huu7ii) 遺跡から出土した鯨骨をDNA分析によって同定した結果、クジラの出土物の約79%がザトウクジラであり、コクジラは13%であったと報告している。さらに、通時的に見てザトウクジラの出土の頻度やパターンは5000年の間大きな変化を見せていない点から、ヌーチャナルスの祖先はおよそ5000年前からザトウクジラを捕獲していた可能性が高いという大胆な結論を導き出している³⁾ (Arndt 2011)。

バンクーバー島西岸の北中部にあるヌートカ湾地域でも古くから捕鯨が行われていたが、考古学調査がほとんど行われていないために、詳しいことは分かってはいない。しかし、ヌートカ島のユクォット (Yuquot) 周辺には木製人形や人間の頭蓋骨が安置されている「捕鯨者の神聖な場所」(whalers' shrine) が多数あることから、捕鯨が重要な活動であったことが推定できる (Jonaitis 1999, 2000)。バンクーバー島西海岸では地域差が見られ、同島西海岸の中部や南部の集団が北部の集団よりも捕鯨に深く関わっていた (Monks, McMillan and St. Claire 2001)。

歴史資料や民族誌によっても、バンクーバー島西岸に分布するヌーチャナルスは捕鯨に従事していたことが、知られている (Arima 1988; Arima and Hoover 2001; Drucker 1951, 1955)。この地域の捕鯨の特徴は、クジラに鉾を打つ者 (harpooner) として捕鯨に従事できるのは伝統的に首長層だけであったという点である。渡辺仁は、この地域では海獣狩猟の中でも捕鯨が特殊化を遂げ、上部階層の専業となっている点を指摘した (渡辺 1990:25; Watanabe 1983, 1988)。捕鯨チーフと呼ばれる世襲の地位があり、捕鯨チーフの家に生まれた男たちのみが鉾打ちとして捕鯨に従事できた⁴⁾。複数の捕鯨チーフの中でも特定の捕鯨チーフが捕鯨に成功することは、彼がほかの捕鯨チーフに比べてより強力な霊力を持ち、クジラを引き寄せるからだと考えられていた。このように、この捕鯨は、信仰や儀礼とも深く結び付いており、単なる経済活動ではなかった。また、捕鯨の成功率はあまり高くはなかったが、クジラを1頭捕獲すると村内だけでは消費できない大量の肉や脂肪を入手できた。それらは近隣や遠隔地の村々に贈与や交易によって流通した。捕鯨チーフは捕鯨の成功とその成果の一部を贈与することによって彼の社会的地位が人びとに承認され、社会的威信を獲得するとともに、交易によって富を蓄積することができた。すなわち、捕鯨の成功は捕鯨チーフの社会的地位や威信、富の蓄積と深く関係していた。このようにヌーチャナルスの捕鯨は儀礼や社会的地位、威信、経済力などと結びついた活動

であった (Curtis 1916; Swanson 1956; cf. Arima 1988)。

しかし19世紀末までにヌーチャヌルスの捕鯨は衰退し、中断していた。その原因は、一説によると、欧米人による商業捕鯨の結果、コクジラやザトウクジラなどが激減したためだといわれているが⁵⁾、最近では、異なる説が有力になりつつある。ブリティッシュ・コロンビア州沿岸で本格的な商業捕鯨が始まったのは1905年頃のことであり⁶⁾、ヌーチャヌルスの捕鯨は同地域で商業捕鯨が開始される以前にすでに衰退していた。バンクーバー島パークレー湾周辺で長年、発掘調査を行ってきたマクミランは、民族誌や言語学からの情報を渉猟し、それらの総合を試みた。彼は、18世紀末から始まった欧米人との接触によって伝染病が蔓延したことや集団間の争いが激化したことなどが原因で人口の減少や再編成が起こったことや、ラッコなどの毛皮交易が人びとに莫大な富をもたらしたことなど、大きな社会変化が見られた点に着目した。これらの変化と連動して、パークレー湾周辺の人びとは小規模になった複数の集団が合併したことにより、人びとはより広い地域を自由に利用できるようになり、冬には海から遠く離れたポートアルバーニ地域で過ごし、夏には河川や海岸でサケ漁に従事するようになった。すなわち、生業がクジラ猟からサケ漁に重点が移ったというのである。このようにヌーチャヌルスの捕鯨の衰退は、人口減少による社会の再編成や毛皮交易の進展、サケ漁が重要になったことなどの複合的な要因の結果であると考えられるのである (McMillan 1999)。そして最後の捕鯨から100年以上たった現在でも、ヌーチャヌルスの捕鯨は中断中である。

ヌーチャヌルスによる先住権獲得運動の展開と捕鯨再開運動

ヌーチャヌルスの人びとが、1990年代に入り、先住民としての権利の獲得に乗り出すとほぼ同じ時期に捕鯨再開の動きも活発になった。その運動の中心的な人物は、フーエイアト・ファースト・ネーション (Huu-ay-aht First Nation) の世襲の捕鯨チーフであるトム・ハッピーヌーク (Tom Happpynook) であった。彼は、1998年3月にバンクーバー島のビクトリア市に捕鯨者の代表を世界中から集め、第1回「世界捕鯨者会議」(The First Assembly of the World Council of Whalers) を開催した中心人物の一人であった。ハッピーヌークは、捕鯨の経済的な重要性とともに、捕鯨活動の社会・文化的機能の重要性を強調している。すなわち、彼は、人びとが捕鯨活動のさまざまなプロセスに参加することにより、社会的な絆が深められ、精神性をたかめ、伝統的な信仰を深めることができると主張している (岩崎 2011: 210)。では、彼らの捕鯨再開という主張が、ブリティッシュ・コロンビア州政府やカナダ政府との交渉の中でどのように展開していったのだろうか。

バンクーバー島のヌーチャヌルスの中の5つのグループが集まり、マールヌス・ファースト・ネーション⁷⁾ (Maa-Nulth First Nation、ヌーチャヌルス全人口7500名のうち約2000名) として1994年2月よりブリティッシュ・コロンビア州政府とカナダ政府を相手に土地

の所有権や天然資源の利用などに関して交渉を行ない、「マールス条約」(The Maa-Nulth Treaty)⁸⁾を締結し、最終合意はついに2011年4月1日に発効した。しかし、捕鯨の権利は同最終合意書には明記されておらず、政治交渉から意図的に外されたようにも見える⁹⁾。

マールス条約と捕鯨

マールス条約は、マールスが享受できる先住民の諸権利についてのカナダ政府とブリティッシュ・コロンビア州政府、マールス・ファースト・ネーションの間での合意書である。マールス・ファースト・ネーションとは、ヌーチャナルスの中のフーエイアト・ファースト・ネーション、トクウアト・ネーション (Toquaht Nation)、カユクトチェクトレセト・ファースト・ネーションズ (Ka:'yu:'k't'h'/Chek'tles7et'h' First Nations)、ユチュクレサト・トライブ (Uchucklesaht Tribe)、ユクルーレット・ファースト・ネーション (Ucluelet First Nation) の5つのグループから構成されている (図2)。

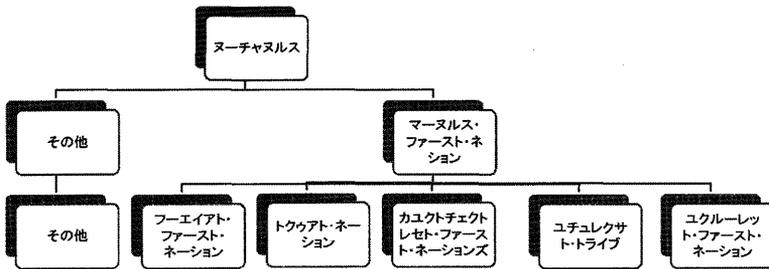


図2. ヌーチャナルスとマールス・ファースト・ネーションの関係

これらの5つのグループはおもにバンクーバー島西岸のパークレー湾およびキュコット湾周辺に伝統的な領域や土地を持つグループである。現在、彼らは、バムフィールド、ポートアルバーニ、ユクルーレット、キャンベルリバー、キュコット湾内の島に住んでいる。人口は合わせて約2000人である。そのうちフーエイアト・ファースト・ネーションの登録会員総数は608名である。約100名がバムフィールドから約12km離れたアナクラ・リザーブに住むが、それ以外はグラップラーやサリタ、ドジャーズコーブなどの他のリザーブに分散して暮らしている。カユクトチェクトレセト・ファースト・ネーションの登録メンバーは約500名である。約150名がキュコットのリザーブの中に住んでいるが、大半はキャンベルリバーやナナイモ、コートニー、ビクトリア、バンクーバー、シアトルなど広域に分散して居住している。トクウアト・ネーションの登録会員総数は115名であるが、8名のみがユクルーレットの町の近くにあるリザーブに住み、107名はリザーブ外に住んでいる。ユチュクレサト・トライブの登録会員総数は約180名である。20名がコウイシユルス・リザーブかヒルタチス・リザーブのいずれかに住み、それ以外の160名はリザーブの外

で生活している。ユクルーレット・ファースト・ネーションの登録会員総数は約600名であり、そのうちの205名がリザーブ内で、393名がリザーブ外で生活している (The First Nations of Maa-nulth Treaty Society n.d)。

マーヌルス条約の内容は、土地、金銭的補償、林業、野生動植物と鳥類、魚類、文化遺産、統治、課税などについての取り決めである¹⁰⁾。その条約の最終合意書を読む限り、土地の所有、補償金、統治、商業漁業や林業、地下資源の開発に関する諸権利の実現が中心となっており、捕鯨に関する文言は一切見られない。すなわち、合意内容は人びとの生活を安定させるための経済的な側面に力点があるように見える。捕鯨再開に関して、唯一、拡大解釈できる部分は、第10章の漁業に関する箇所である。同章の10.1.1.には「各マーヌルス・ファースト・ネーションは、この合意に従って、自家消費目的（食料、社会的および儀礼的目的）で魚類や水生植物を自らの漁業領域でとる権利を有する」とある。そして魚類は、同最終合意書の最後にある語彙定義によると、次のように定義されている。

- 魚類とは
- a. 魚
 - b. 貝、甲殻類、海生動物 (marine animals)
 - c. 貝、甲殻類、海生動物の一部分
 - d. 魚、貝、甲殻類、海生動物の卵、精子、孵化したばかりのもの、幼生、子供、未成熟段階のもの、成熟段階のもの

この定義に従うと、魚類の中に海生動物が入っており、鯨類もこの中に入ると考えられる。しかし、現段階ではこの箇所は広義に解釈されていない。

マーヌルスの人びとは、この条約を交渉する過程で、条約内容を有利にかつできるだけ早期に締結させるために¹¹⁾、環境団体や動物愛護団体が猛反対する捕鯨に関する権利を条約の中に盛り込むことを2006年時点で断念した。マーヌス条約の中には捕鯨が人びとの権利として明記されていないが、ヌーチャヌルスの捕鯨再開を主導した捕鯨チーフのトム・ハッピーヌークらは、捕鯨の再開を完全にあきらめたわけではない。彼は、副次的合意として向こう25年のうちに現在、決まっている諸権利の一部を放棄する代わりに捕鯨の権利を認めてもらう可能性が残っている点を強調している。

小結

マーヌルス・ファースト・ネーションが、カナダ政府やブリティッシュ・コロンビア州を相手に捕鯨再開の交渉をうまく進めたとしても、その実現のためには、環境影響評価を数年かけて実施しなければならない。仮にその結果、捕鯨が容認されたとしても、米国のマカーの場合のように環境保護団体や動物愛護団体が反捕鯨運動を大々的に展開することが

予想される。また、現在、バンクーバー島西部のトフィノやユクルーレットは、カナダ西部を代表する保養地となり、年間100万人以上が訪れる場所である。そこではホエール・ウォッチングなど自然を売り物にする観光産業が盛んに行われており、地元の人びとの最大の収入源となっている。例えば、トフィノにおけるホエール・ウォッチングは年間600万～800万カナダ・ドルの売り上げを誇っている (Russell 2001: 204)。大半の事業主はヨーロッパ系カナダ人か米国人であるが、同地域に居住しているマーナルス・ファースト・ネーションの人びとも間接的に経済的な恩恵を預かっている。

マーナルス条約に基づけば、捕鯨の再開は法的には不可能ではないが、諸権利についての交渉過程や最終合意書を読む限りでは、マーナルスの代表団は、人びとの生活や経済状態の向上に直結する商業漁業や林業、地下資源開発などから得られる利益の確保を、捕鯨の再開よりも優先しているように考えられる。このような状況の中、ヌーチャナルスの人びとが果たして捕鯨再開を積極的に行うかどうかはきわめて疑問であるといわざるを得ない。しかしながら、アラスカのイヌピアットやカナダ・イヌイットの捕鯨の実施を参考にすると、捕鯨の実施は先住民のエスニック・アイデンティティ (ethnic identity) に深く関わっているため (岸上 2012, 2013)、条約の履行によってヌーチャナルスの経済状態が良くなり、経済的な余裕が生まれると捕鯨再開の動きが活発になり、復活する可能性がある¹²⁾。

私自身は、当事者である先住民の人びとが彼らの捕鯨の再開や継続を望んでいるならば、その動きを文化人類学者としてできる限り支援したいと考える。ヌーチャナルスの捕鯨再開について、今後の成り行きを見守りたい。

注

- 1) 言語学者の中山俊秀氏は「ヌーチャーツヌヒ」(中山 n.d) と、金子亨氏は「ヌー・チャ・ヌヒ」(金子 n.d) と表記しているが、本稿では現地で使用されている英語発音に従う。
- 2) 民族誌的には、海岸に打ち上げられた寄りクジラの利用は報告されているが、バンクーバー島西岸地域とオリンピック半島沿岸部の北西海岸先住民以外のグループによる活発な捕鯨はあまり知られていない。しかし、考古学的にはオレゴン州北部のパーティー (Par-Tee) 遺跡からは、ザトウクジラの骨が出土しており、1300から1600年前には捕鯨を行っていたことが動物遺存体のDNA分析から指摘されている (Losey and Yang 2007)。そのため、クジラが近くを回遊している地域では、捕鯨を実施していた可能性がある。
- 3) 北太平洋地域における捕鯨の起源は、2万年前から多数生息していたが、人間の捕獲によって絶滅したステラー海牛 (Steller's sea cow) の狩猟ではないかとの説がある (Domning 1972)。
- 4) 捕鯨のやり方については、アリマ (Arima 1988:18-22) を読みたい。
- 5) 遠距離を回遊するコククジラは、北太平洋や北極海での商業捕鯨で捕獲され、頭数が減少した可能性はあるが、ヌーチャナルスがおもな捕獲対象としてきたザトウクジラはほぼ一年中、バンクーバー島西部海岸周辺に住みついているため、1905年以前は商業捕鯨の影響を直接的に受けていたと考えることは難しい。

- 6) バンクーバー島では、1868年から約6年間、ザトウクジラを捕獲対象として沿岸商業捕鯨が実施されたことがあったが、1871年にブリティッシュ・コロンビア州がカナダ連邦に加盟すると、カナダの海洋法によって爆弾を利用した捕鯨は禁止された。このためビクトリア市に本拠を置く投資家たちは、捕鯨から手を引き、アザラシ猟に投資先を転向した（The Maritime Museum of British Columbiaの展示キャプションからの情報）。
- 7) 「マーヌルス」とは、「(バンクーバー島) 沿岸部の村々」(villages along the coast) を意味する。
- 8) 先住民族のネーション（国家）とカナダというネーション（国家）との間での取り決めであるため、条約という表現が使用されている。
- 9) カナダは1982年に国際捕鯨委員会（IWC）を脱会し、現在はオブザーバーとして参加している。したがって、カナダの先住民による捕鯨は、IWCが管轄している「先住民生存捕鯨」(aboriginal subsistence whaling) ではない。現在、カナダ極北地域に住むイヌイット・イヌヴィアルイットは1990年代に捕鯨を再開し、ヌナヴート準州とヌナヴィック地域（ケベック州極北部）ではホッキョククジラの捕獲が行われている。詳しくは、岩崎（2005）や岸上（2013）を参照されたい。
- 10) マーヌルス条約の最終合意書は、カナダ政府先住民局の下記のウェブサイトで見ることが出来る。http://www.aadnc-aandc.gc.ca/DAM/DAM-INTER-BC/STAGING/texte-text/mna_fa_mnafa_1335899212893_eng.pdf
- 11) ブリティッシュ・コロンビア州における先住民族による諸権利の交渉は、6段階に分けられ、それが条約となり、発効されるまでには非常に長い時間を要する。現時点で、同州において条約に関して最終合意まで到達したのは、私が知る限り、ニスガ（Nishga）とマーヌルスだけである。
- 12) たとえば、先住民生存捕鯨として商業性が否定されている「イヌピアットの捕鯨」の継続の実施は、捕鯨にかかる経費をまかなうための石油会社からの配当金や安定した収入が前提となっている。マーヌルスの場合にも捕鯨を行なうための資金の確保が不可欠である。その上で、マーヌルス先住民団体からの捕鯨者への経済的な支援やカナダ政府からの政治的な支援が必要であると考えられる。

謝辞

本研究は、平成25年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（研究課題番号21401045）の研究成果の一部である。平成25年8月にカナダ・バンクーバー島西部およびビクトリア、バンクーバーで現地調査を実施した。現地の方々のみならず、ブリティッシュ・コロンビア州立博物館のGrant Keddie博士とブリティッシュ・コロンビア大学のBruce Miller教授、サイモンフレーザー大学のAlan D. McMillan元教授からヌーチャヌルスの捕鯨について文献をはじめご教示を得た。また、マッギル大学のJames M. Savelle先生には英文要旨を、国立民族学博物館の中村真里絵外来研究員には本文についてコメントなどを頂戴した。記して感謝の微意を示す次第である。

参照・引用文献

<和文>

秋道智彌

1994 『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会：東京

岩崎・グッドマン・まさみ

2005 「イヌビアルイト：ホッキョクセミクジラを捕獲」富田虎男・スチュートヘンリ編『北米』（世界の民族 第7巻），pp.232-246. 明石書店：東京

2011 「先住民族による捕鯨活動」松本博之編『海洋環境保全の人類学』（国立民族学博物館調査報告），pp.197-224. 国立民族学博物館：吹田

金子亨

nd. 「ヌートカ語」URL: <http://www.chikyukotobamura.org/muse/low060409.html>
(2013年9月10日閲覧)

岸上伸啓

2012 「アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp.64-82. 成山堂書店：東京

2013 「カナダ・イヌイトのホッキョククジラ猟と先住権」『カナダ研究年報』33:1-15.

中山俊秀

nd. 「意外性との出会い—ヌートカ語—」

URL:<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/a02/bunka/nakayamat.html> (2013年9月10日閲覧)

浜口尚

2012 「先住民生存捕鯨再考」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp.45-63. 成山堂書店：東京

2013 「サンダーバードは再びマカーの地に舞い降りるのか？—マカー捕鯨の歴史、現状および課題—」『園田学園女子大学論文集』47：155-176.

渡辺仁

1990 『縄文式階層化社会』六興出版：東京

<欧文>

Arima, Eugene

1988 Notes on Nootkan Sea Mammal Hunting. *Arctic Anthropology* 25: 16-27.

Arima, Eugene and John Dewhirst

1990 Nootkans of Vancouver Island. In Wayne Suttles (ed.) *Northwest Coast* (Handbook of North American Indians, Vol. 7), pp.391-411. Smithsonian Institution: Washington, DC.

Arima, Eugene and Alan Hoover

- 2011 *The Whaling People of the West Coast of Vancouver Island and Cape Flattery*. Royal BC Museum: Victoria
- Arndt, Ursula M.
2011 *Ancient DNA Analysis of Northeast Pacific Humpback Whale (Megaptera Novaeangliae)*. Ph.D Dissertation, Department of Archaeology, Simon Fraser University
- Cote, Charlotte
2010 *Spirits of Our Whaling Ancestors: Revitalizing Makah & Nuw-chah-nulth Traditions*. University of Washington Press: Seattle
- Curtis, Edward S.
1916 *The North American Indian. Vol. 11 Nootka and Haida*. Johnson Reprint Corporation: New York (1970)
- Domning, Daryl P.
1972 Steller's Sea Cow and the Origin of North Pacific Aboriginal Whaling. *Syesis* 5: 187-189.
- Drucker, Philip
1951 The Northern and Central Nootkan Tribes. Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology Bulletin No.144. Government Printing Office: Washington, DC.
1955 *Indians of the Northwest Coast*. American Museum of Natural History: New York
- Huelsbeck, David R.
1988 Whaling in the Precontact Economy of the Central Northwest Coast. *Arctic Anthropology* 25(1):1-15.
- Jonaitis, Aldona
1999 *The Yuquot Whalers' Shrine*. University of Washington Press: Seattle and London
2000 The Mowachaht Whalers' Shrine: History Revealed by Carvings. In Hoover, Alan L. (ed.) *Nuw-Chah-Nulth Voices, Histories, Objects and Journeys*. Royal British Columbia Museum: Victoria
- Losey, Robert J. and Dongya Y. Yang
2007 Opportunistic Whale Hunting on the Southern Northwest Coast: Ancient DNA, Artifact, and Ethnographic Evidence. *American Antiquity* 72(4): 657-676.
- McMillan, Alan D.
1999 *Since the Time of the Transformers: The Ancient Heritage of the Nuw-chah-nulth, Ditidaht, and Makah*. UBC Press: Vancouver
- McMillan, Alan D., Iain McKechnie, Denis E. St. Claire, and S. Gay Frederick
2008 Exploring Variability in Maritime Resource Use on the Northwest Coast: A Case Study from Barkley Sound, Western Vancouver Island. *Canadian Journal of Archaeology* 32: 214-238.

McMillan, Alan D. and Denis E. St. Claire

2005 *Ts'ishaa: Archaeology and Ethnography of a Nuu-chah-nulth Origin Site in Barkely Sound*. Archaeology Press, Simon Fraser University: Burnaby

2012 *Huu'ii: Household Archaeology at a Nuu-chah-nulth Village Site in Barkley Sound*. Archaeology Press, Simon Fraser University: Burnaby

Monks, Gregory G., Alan D. McMillan, and Denis E. St. Claire.

2001 Nuu-cha-nulth Whaling: Archaeological Insights into Antiquity, Species Preferences, and Cultural Importance. *Arctic Anthropology* 38(1): 60-81.

Renker, Ann M.

1996 Whale Hunting and the Makah Tribe: A Needs Statement. IWC/48/ASI.

Renker, Ann M. and Erna Gunther

1990 Makah. In Wayne Suttles (ed.) *Northwest Coast* (Handbook of North American Indians, Vol. 7), pp.422-430. Smithsonian Institution: Washington, DC.

Russell, Dick

2001 *Eye of the Whale: Epic Passage from Baja to Siberia*. Simon and Schoster: New York

Singh, Ram Raj Prasad

1956 *Aboriginal Economic System of the Olympic Peninsula Indians, Western Washington*. PhD Dissertation, University of Washington

1966 *Aboriginal Economic System of the Olympic Peninsula Indians, Western Washington*. The Sacramento Anthropological Society: Sacramento

Swan, James

1870 The Indians of Cape Flattery. *Smithsonian Contributions to Knowledge*. No. 220, Vol.16, Art. 8:1-108.

Swanson, Earl H.

1956 Nootka and California Gray Whale. *Northwest Quarterly* 47: 52-56.

The First Nations of Maa-nulth Treaty Society

n.d. About Us - Maa-nulth First Nations Community Profiles.

URL: <http://www.maanulth.ca/about.asp> (2013年9月13日閲覧)

Watanabe, Hitoshi

1983 Occupational Differentiation and Social Stratification: The Case of Northern Pacific Maritime Food Gatherers. *Current Anthropology* 24(2): 217-219.

1988 On the Social Anthropology of Hunter-Gatherers. *Current Anthropology* 29(3): 489-490.

(2013年11月10日採択)